

「高田短期大学ディプロマ・ポリシー」到達度に関する研究

A Study of Achievement of the Diploma Policy of Takada Junior College

山 口 昌 澄

Masazumi Yamaguchi

(要約)

本研究においては、本学が実施している「ディプロマ・ポリシールーブリック」2021年度卒業生データを活用し、卒業時のポリシー達成度状況の把握や、ルーブリックの次元性に関わる構造分析、他の学修成果指標（GPA、学生生活満足度）との関連分析を行った。その結果、学科・コースにおける達成度傾向の違いや、本学DPルーブリック評価構造、指標としての妥当性について有意義な知見が得られた。一方で、調査・運用方法の不備やDPルーブリックが本学における学修実態を十分反映していない可能性等も示唆され、今後の改善が求められる。

(キーワード)

ディプロマ・ポリシー、ルーブリック、学修成果

1. 問題と目的

大学における教育の質保証が、社会的に強く要請されるようになって久しい。その代表的なものが、7年に1回実施される第三者評価（認証評価）であり、クールを重ねるごとに根拠データ（エビデンス）に基づく報告・評価という形式が定着している。認証評価において特に重視されるのが「学修成果（Student Learning Outcomes）」^{註1}である。学修成果とは、中央教育審議会答申（2008）によれば、教育課程や教育プログラム・コースにおいて、一定の学習期間終了時に学生が学習を通して知り、理解し、行い、実演できることを期待される内容を表明したものであり、学習を通して達成すべき知識、スキル、態度などを示すとされる。現状、多くの大学において「学業成績（GPA）」、「就職率」、「免許・資格取得率」、「学修ポートフォリオ」、「授業評価アンケート結果」、「学修・学生生活実態調査結果」、「卒業生調査結果」等、多岐にわたるデータが「学修成果」として示され、それらに基づく自己点検・評価活動がなされている。学修成果データにおいて問われるのは、いかにその大学での学びの実態に即した形で成果を可視化するか、である。その中で近年注目されているのが、各大学における建学精神に基づく人材育成像、学生における卒業認定や学士力にも深く関わる「ディプロマ・ポリシー（以下「DP」）」の到達度について、ルーブリックを用いて評価する方法である。この背景には、高等教育における学修成果の可視化や把握、改善への有効活用が求められる中、知識面だけでなく、培った諸能力を統合し活用・遂行するパフォーマンス面評価に対するニーズの高まりがある（安原・河野・萩田，2015）。

ルーブリックとは本来的には、パフォーマンスや遂行能力といった質的内容を量的表現へ変換するツールであり、測定すべき「観点」と、観点ごとの達成水準を表す「レベル」を評価者に示すことが一般的である。また各観点のレベルとして簡潔かつ具体的表現の「記述語」が記載・配置され、被評価者の状態と記述語内容の合致がレベル到達とされる（安原・河野・萩田，2015）。

本学においても「DP ルーブリック」の作成に取り組んできた。まず「学力の三要素」に対応しつつ、本学「建学の精神」「教育の理念」の具現化のため2019年度にDP改定をおこなった。その新たなDPの到達度をアセスメントすべく、全学科・コース共通の「全学共通ディプロマ・ポリシー到達度評価ルーブリック（以下、「全学DPルーブリック）」、学科・コース（専門教育）別のルーブリック（以下「学科・コースDPルーブリック）」として、「子ども学科ディプロマ・ポリシー到達度評価ルーブリック」、「キャリア育成学科オフィスワークコースディプロマ・ポリシー到達度評価ルーブリック」、「キャリア育成学科介護福祉コースディプロマ・ポリシー到達度評価ルーブリック」を作成し、2019年度から学生による自己評価の実施にいたった。しかし昨今の新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、当初の実施計画を断念せざる得なくなった。現在のところ、本学における現行DPルーブリックの卒業時データ収集は、2021年度卒業生のみとなっている（2022年3月時点）。

大学教育の質保証に関わる自己点検・評価活動というのは、学修成果の実態把握や検証結果を社会に示し、それらエビデンスに基づく課題の抽出、改善計画策定・実施など、いわゆるPDCAサイクルに基づく不断の取り組みが求められる。これは学修成果として測定・活用される指標についても同様であり、その大学での学びの実態に即したものの検証が必要である。

以上より本研究では、卒業時DP到達度データを実証的に分析し、本学学修成果の実態や、指標としての妥当性について検討することを目的とする。これらに関連し、以下3点の分析・検討を行なう。

- ①卒業時DP到達度結果について
- ②DPルーブリック次元性に関する構造分析
- ③他の学修成果指標との関連分析

上記分析で得られた知見をもとに、今後の改善に向けた提言もおこないたい。

2. 方法

(1) 調査内容

①全学DPルーブリック

本学における全学的な共通到達目標として、4つの観点と8つの到達目標（カテゴリー）が設定されている。観点Ⅰ「倫理」のカテゴリーは「1 いのちの平等、尊厳性への気づき」「2 生かされていることへの感謝」「3 倫理観」、観点Ⅱ「知識・技能」は「4 知識、技能」、観点Ⅲ「思考・判断・表現」は「5 論理的で柔軟な思考と判断力」「6 自己表現力」、観点Ⅳ「主体性・多様性・協働性」は「7 主体的な行動力」「8 他者との協働力」となっている（付表①）。

②子ども学科DPルーブリック

本学子ども学科の到達目標として4つの観点と6つの下位カテゴリーが設定されている。観点Ⅰ「倫理」のカテゴリーは「A 倫理観」、観点Ⅱ「知識・技能」では「B 知識、技能」、観点Ⅲ「思考・判断・表現」では「C 論理的で柔軟な思考と判断力」「D 自己表現力」、観点Ⅳ「主体性・多様性・協働性」は「E 主体的な行動力」「F 他者との協働力」となっている（付表②）。

③オフィスDPルーブリック

本学キャリア育成学科オフィスワークコースの到達目標として、4つの観点と6つのカテゴリーが設定されている。観点Ⅰ「知識・技能」のカテゴリーは「A 知識、技能【専門能力】」、観点Ⅱ「思考・判断・表現」は「B 論理的で柔軟な思考と判断力【シンキング】」「C 良好な人間関係を築く力【ヒューマンスキル】」、観点Ⅲ「主体性・多様性・協働性」は「D 主体的な行動力【アクション】」「E 他者との協働力【チームワーク】」、観点Ⅳ「キャリア」は「F キャリアデザイン【キャリア】」となっている（付表③）。

④介護 DP ルーブリック

本学キャリア育成学科介護福祉コースの到達目標として、4つの観点と6つのカテゴリーが設定されている。観点Ⅰ「倫理観」のカテゴリーは「A 倫理観」、観点Ⅱ「知識・技能」は「B 知識、技能」、観点Ⅲ「思考・判断・表現」は「C 論理的で柔軟な思考と判断力」「D 自己表現力」、観点Ⅳ「主体性・多様性・協働性」は「E 主体的な行動力」「F 他者との協働力」となっている（付表④）。

上記①～④の全カテゴリーごとに、達成レベルに応じた記述語（レベル）が4つ設定され、評価者が合致する内容を評価・選択できるようになっている。

⑤その他の学修成果指標

上記 DP ルーブリック到達度との関連が予想される学修成果指標として、卒業時学業成績から算出された GPA（4点満点）と「高短生調査」（学生生活実態調査）における項目「現在の短大生活に満足している」の回答得点を用いた。満足度の評定は「当てはまる（4点）」「やや当てはまる（3点）」「やや当てはまらない（2点）」「当てはまらない（1点）」の4件法となっている。

GPAの高い学生は、本学教育をより高水準で修め、学修成果を十分獲得していると考えられる。よって教育カリキュラム編成上の基本原理である DP の到達度に関しても、高レベルであることが予想される。また DP 到達度の高まりが、本学の教育理念・目標に対する理解の深まりや学修成果向上と深く関連するならば、学生生活に対する満足度の高まりにも繋がることが予想される。

(2) 調査および対象

調査対象は、2022年3月本学卒業生220名（子ども学科128名（2019年度入学生1名含む）、キャリア育成学科オフィスワークコース68名（2019年度入学生1名含む）・介護福祉コース24名）であった。

今回のルーブリック調査については、インターネット上での回答呼びかけであった。よって未回答者も多く、最終的な分析対象者は125名（全卒業生の内56.81%）、子ども学科83名（学科内64.84%）、キャリア育成学科オフィスワークコース29名（コース内42.65%）・介護福祉コース13名（コース内54.17%）となった。

(3) データ集計方法・分析について

DP ルーブリックのデータ集計については、本学が活用しているクラウド型の教育支援サービス「manaba（株式会社朝日ネット）」のアンケート機能を用いて、インターネット上から2022年3月中に卒業生へ回答するよう呼びかけ回収した。なお教示文として「高田短期大学を卒業するにあたり本学のディ

プロマ・ポリシーに示した学習到達目標にどれだけ到達しているかについてアンケート調査します。なお、この調査は高田短期大学の教育をより良くするための基礎資料の蓄積を目的として行います。回答いただいた内容は全て統計的に処理をしますので、個人を特定することはありません。ご協力をお願いします」と付した。各観点下位カテゴリーについては、評価「0」から「3」のポイント割り当てとなっているが（付表1～4）、結果の分かりやすさを重視し、全て「1」から「4」の割り当てに統一した。集積データは、IBM社の「SPSS Statistics 25」を用いて分析し、欠損ケースは分析ごとに除外した。

3. 結果と考察

(1) DP ルーブリック卒業時到達度について

①全学 DP ルーブリック

下位カテゴリー	平均値(SD)
1 いのちの平等、尊厳性への気づき	3.17 (.77)
2 生かされていることへの感謝	3.08 (.87)
3 倫理観	3.06 (.83)
4 知識、技能	2.83 (.79)
5 論理的で柔軟な思考と判断力	2.78 (.87)
6 自己表現力	2.80 (.92)
7 主体的な行動力	2.87 (.81)
8 他者との協働力	3.06 (.86)
総ポイント	23.66 (5.42)

n=108

2020年度入学生における卒業時（2022年3月）

全学 DP 到達度（平均値）を表1に示す。

「1 いのちの平等、尊厳性への気づき」が3.17 (.77)、「2 生かされていることへの感謝」が3.08 (.87)、「3 倫理観」が3.06 (.84)、「4 知識、技能」が2.83 (.79)、「5 論理的で柔軟な思考と判断力」が2.78 (.88)、「6 自己表現力」が2.80 (.93)、「7 主体的な行動力」が2.87 (.81)、「8 他者との協働力」

が3.06 (.86)、総ポイント23.66 (5.42)という結果となった（()内は標準偏差）。なお本学では、各下位カテゴリーでポイント「3」（総ポイントで24）を卒業時に到達すべきレベル（「到達目標」として示している（付表①では水準2に相当）。到達目標をクリアしたカテゴリー1～3・8については、本学における建学精神「仏教精神に基づく人間形成」、教育理念（「『やわらか心^{註2}』の社会人の育成」）に関連するような内容であり、本学での学びを通じそれらが学生にも浸透し、能力や態度として獲得されたと考えられる。一方で、本学の学びで得た知識や技術、能力等を現実社会の中でどのように活かし発揮するかというカテゴリー4～7については、到達目標に届かないという結果となった。

だが入学時（2020年4月）との比較において、比較可能な108名におけるt検定（対応サンプル）をおこなった結果、全カテゴリーで有意差（＝向上）がみられた（ $t(107) = 2.41 \sim 6.65$, $p < .05 \sim .001$ ）。

以上から、全学 DP 到達度における、入学時から卒業時にかけて向上は確認できたが、実態以上の達成レベルを学生に求めていた可能性が考えられる。本学における教育目的が「高度な専門知識や技術・技能を身につけ、『やわらか心』で地域社会に貢献できる保育者、オフィスワーカー、介護福祉士の育成」（本学学生便覧、ホームページ等より）であるという点から、到達目標を維持するならば、今回未到達だったカテゴリーに関する教育内容や学修成果の改善に取り組むべきであろう。

一方で、ルーブリックにおける観点や記述語（レベル）を、本学学生の学びの実状に合わせて再調整・修正していく取り組みも必要ではないかと考えられる。

②学科・コース DP ルーブリック

表 2 学科・コース DP ルーブリック到達度 (平均値と (SD)) 子ども学科 n=83、オフィスワークコース n=29、介護福祉コース n=13

学科	下位カテゴリー	平均値 (SD)	コース	下位カテゴリー	平均値 (SD)	コース	下位カテゴリー	平均値 (SD)
子ども学科	A 倫理観	3.17 (.66)	オフィスワークコース	A 知識・技能【専門能力】	2.78 (.75)	介護福祉コース	A 倫理観	2.86 (1.10)
	B 知識、技能	3.08 (.68)		B 論理的で柔軟な思考と判断力【シンキング】	2.41 (.76)		B 知識、技能	3.36 (.93)
	C 論理的で柔軟な思考と判断力	2.96 (.75)		C 良好な人間関係を築く力【ヒューマンスキル】	2.84 (.63)		C 論理的で柔軟な思考と判断力	3.07 (1.27)
	D 自己表現力	3.00 (.77)		D 主体的な行動力【アクション】	2.72 (.73)		D 自己表現力	3.29 (.99)
	E 主体的な行動力	2.98 (.81)		E 他者との協働力【チームワーク】	2.69 (.69)		E 主体的な行動力	3.21 (1.05)
	F 他者との協働力	3.21 (.78)		F キャリアデザイン【キャリア】	2.59 (.76)		F 他者との協働力	3.21 (1.12)
総ポイント	18.39 (3.67)	総ポイント	16.03 (3.17)	総ポイント	19.00 (5.04)			

2020年度入学生における卒業時(2022年3月)学科・コース DP 到達度(平均値)を表2に示す。

子ども学科においては、「A 倫理観」が3.17(.66)、「B 知識、技能」が3.08(.68)、「C 論理的で柔軟な思考と判断力」が2.96(.75)、「D 自己表現力」が3.00(.77)、「E 主体的な行動力」が2.98(.81)、「F 他者との協働力」が3.21(.78)、総ポイント18.39(3.67)という結果(()内は標準偏差)となり、概ね到達目標をクリアしていることが分かった。

オフィスワークコースにおいては、「A 知識、技能【専門能力】」2.78(.75)、「B 論理的で柔軟な思考と判断力【シンキング】」2.41(.76)、「C 良好な人間関係を築く力【ヒューマンスキル】」2.84(.63)、「D 主体的な行動力【アクション】」2.72(.73)、「E 他者との協働力【チームワーク】」2.69(.69)、「F キャリアデザイン【キャリア】」2.59(.76)、総ポイント16.03(3.17)という結果(()内は標準偏差)であった。全カテゴリーで到達目標以下となり、低評価傾向にあったといえる。

介護福祉コースにおいては、「A 倫理観」2.86(1.10)、「B 知識、技能」3.36(.93)、「C 論理的で柔軟な思考と判断力」3.07(1.27)、「D 自己表現力」3.29(.99)、「E 主体的な行動力」3.21(1.05)、「F 他者との協働力」3.21(1.12)、総ポイント19.00(5.04)という結果(()内は標準偏差)となった。子ども学科同様、概ね本学が求める到達目標をクリアしていた。

オフィスワークコースにおける低評価傾向については、学科・コース間におけるルーブリック内容の違いが影響したのではないかと考えられる。子ども学科や介護福祉コースのルーブリック内容をみると、保育・介護場面を中心とした所属学生にイメージしやすいものであった(付表②・④)。それに対し、オフィスワークコースのルーブリックでは、幅広く一般的なビジネス場面を想定した、やや抽象度の高い内容が問われていた(付表③)。よって所属学生において、大学での学びや成果と直接的に結びつきにくく、その達成も困難と認識された可能性がある。

以上より、全学 DP ルーブリック同様、各学科・コースにおける教育内容や学修成果面での改善・向上はもとより、ルーブリックの内容面の見直しにも取り組むべきといえる。

なお学科・コースルーブリック評価については、入学時点での実施ができておらず、入学時・卒業時の比較は行えなかった。

(2) DP ルーブリックの構造分析について

全学 DP ルーブリックの内部構造を検討するため、探索的因子分析をおこなった。固有値の減衰状況は「5.35、.69、.49…」となり、1因子解が妥当であると判断された。因子寄与率は62.30%と、説明

率として十分といえる。主因子法による因子負荷量を表3に示す。

下位カテゴリー	I
1 いのちの平等、尊厳性への気づき	.72
2 生かされていることへの感謝	.73
3 倫理観	.77
4 知識、技能	.81
5 論理的で柔軟な思考と判断力	.86
6 自己表現力	.79
7 主体的な行動力	.87
8 他者との協働力	.74

また内的整合性の検討として、信頼性係数（クロンバックの α 係数）を算出したところ、 $\alpha=.93$ と高い信頼性が示され、カテゴリー（項目）間の凝集性の高さが示された。

以上の分析結果から、現在採用されている全学 DP ルーブリックは複数の観点・カテゴリーから構成されているが、今回の分析結果において、本学学生（回答者）に単一的（統一的）概念として捉えられていることが示唆された。また上記内的整合性の高さから、本ルーブリックは、観点やカテゴリーといった細かな点からというより、全体として評価することに適した指標であることも示された。

学科・コース DP ルーブリックについては、構造分析に耐えうる十分なサンプル数が得られなかった。よって今回は、全学 DP ルーブリックと同様とみなして、総ポイントを「各学科・コースにおける DP 到達度」として以後の分析に用いることとする。

(3) 学修成果指標間の関連について

「DP ルーブリック到達度（全学／学科・コース）総ポイント」、「GPA」、「学生生活満足度」間の関連状況について検討するため、欠損ケースを除いた 103 名のデータに対し、相関分析（ピアソンの積率相関分析）をおこなった（表4）。

	学科・コース DP	学生生活満足度	GPA
全学的 DP	.62***	.19n, s	-.02n. s.
学科・コース DP		.33***	-.08n. s.

まず2つの DP ルーブリック間において $r=.62$ ($p<.001$) と比較的高い相関がみられた。各ルーブリックが、ともに「DP 到達度」という枠組を共有している

点から妥当であり、両ルーブリックの収束的妥当性を示す結果といえる。

次に学生生活満足度との関連においては、全学的 DP 到達度とは無相関、学科・コース DP 到達度とは $r=.33$ ($p<.001$) の有意な弱い相関がみられた。本学は保育者、オフィスワーカー、介護従事者といった専門職養成を主眼に、カリキュラムや学習内容が編成されており、学生側も上記専門職になることを主たる目的（目標）として入学している。以上から各学科・コースにおける学びの内容が反映された学科・コース DP ルーブリックの方が学生生活満足度に関連したと解釈できる。さらに上記の関連の違いが、各ルーブリックの特性の違いや、弁別的妥当性を示唆する結果とも解釈できる。

最後に GPA については、両ルーブリックとも有意な相関はみられなかった。GPA は教員による成績評価が反映された客観的指標であり、DP ルーブリックは学生による自己評価という主観的指標であるので、関連の低さは一定程度理解できる。だが成績評価にも深く関わる「科目到達目標」の基準を決める枠組みが DP ルーブリックであるという前提（溝口・小山（2020））に立つならば、課題の残る結果といえる。

GPA との関連のなさの背景として、評価者間（学生／教員）の学修成果に関する認識や評価上のギャッ

プという問題がある。例えば、学生が DP 到達に関し「到達した」と評価していても、それは実態（学修成果や学業成績）を伴わない、偏ったものである可能性が考えられる。松下（2012）は、学修評価上の有効な手法としてルーブリックを挙げ、評価にあたっては評価者の主観的判断も排除されないとする一方、評価が恣意的にならないよう、複数の主観のつき合わせや調整によって「間主観性」を担保する必要があることを指摘している。

以上のことから、DP ルーブリックの内容や評価方法が、本学学生の学びや学修成果の実態に即したものとのかという疑念も生じてくる。このことに関しては、DP ルーブリックの内容や実施方法の見直しはもとより、授業内容や進め方、成績評価方法が、DP に沿ったものかという本質的な検討・改善も求められているといえるのではないだろうか。

4. まとめと今後に向けた課題

本研究では、「DP 到達度」という観点から、現在得られている本学卒業生データの実証的分析をおこない、本学学生の学修成果の実態把握や、DP ルーブリックの指標としての妥当性について検討し、自己点検・評価活動における有益な知見が得られた。例えば、学科・コースにおける DP 到達度状況の傾向差や、全学的 DP ルーブリックの 1 次元構造を示す結果が示された点などである。

以下では今後に向けた課題について記す。まず、データサンプル数の確保という問題である。先述の通り、対面ではなくインターネット上での回答呼びかけであったので、今回は卒業生の 6 割以下サンプルでの分析となった。よって本研究での検証結果が、本学の学生全体に当てはまるのかという点では不十分といえよう。以後はできる限り対面上の呼びかけを行い、その場で回答を求めるといったデータ確保に努めるべきである。データ集積が進む中で、例えば今回できなかった学科・コース DP ルーブリックの構造分析など、さらに多くの有益な知見が得られ、より明確なエビデンスを示すことにも繋がるであろう。

次に、現行の DP ルーブリックの構造に関することである。今回の分析結果では、1 次元構造が得られたが、本来ルーブリックは、パフォーマンス（成果）を複合的視点から評価する多次元的なものである（松下，2012）。「DP 達成度」という、本来的に幅広い意味内容が含まれる学修成果を評価する上で、評価者における評価の多次元性が確保・認識されることは重要といえる。この点については、さらにデータを蓄積し検証を重ねる中で、今後多次元性が示される可能性も考えられる。あるいは、ルーブリックを、より学生に分かりやすい、具体的内容を有したものに改良する中で実現するかもしれない。

その他、本学における DP ルーブリック運用上の課題として、実施時期や回数、フィードバックが挙げられる。ルーブリックは形成的評価を行なう指標であり（松下，2012）、やはり当初の計画通り、入学時、Semester 終了時、卒業時と経時的に効果検証し、他の成果指標とも併せた「学修成果・到達度」を学生へ提示していくことで、効果を発するものと考えられる。

【註】

1. 中央教育審議会（2008）においては「学習支援」とされているが、本稿では大学および短期大学設

置基準および中央教育審議会(2012)の表記に従い、「学修支援」としている。

2. 「やわらか心」とは、本学では「私たちがものを見る時は、自分のものさしではかって優劣をつけ、好き嫌いを必ず言います。しかし、それは、自分の立場から見た、一方的な見方に過ぎません。すべてのものは、本来、優劣や上下などなく、それぞれがそれぞれの光を放って、光り輝いて存在しています。光り輝くそれらの個性を、『みんなちがって、みんないい』（金子みすゞ）とすべて受け入れることのできる、和らいだおらかな心、それが『やわらか心』です」と定義されている（本学HPより）

引用文献

中央教育審議会. “学士課程教育の構築に向けて(答申).” 文部科学省.2008-12-24.https://www.mext.go.jp/b_menu/singi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm,(参照 2022-11-01)

松下佳代. パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて. 京都大学高等教育研究. 2012, 18, pp.75-114.

溝口 侑・小山 理子. (2020) ディプロマ・ポリシー達成度を評価するルーブリックの開発, 京都光華女子大学 京都光華女子大学短期大学部研究紀要, 2020, 58, pp.191-203

安原 智久・河野 武幸・荻田 喜代一 (2015) ディプロマ・ポリシーに基づくパフォーマンス評価とルーブリック, ファルマシア, 2015, 51 (2) , pp.143-148

謝辞

本論文の執筆にあたり、データ提供にご協力いただきました2021年度卒業生の皆様には心より感謝申し上げます。

付表① 全学共通ディプロマ・ポリシー到達度評価ルーブリック

観点	カテゴリ	評価3	評価2 (DP達成レベル)	評価1	評価0
倫理	1	いのちの平等、尊厳性への気づき	あらゆる存在が個人の価値観を超えて絶対的な尊厳性をもつて存在することを深く理解している。	あらゆる存在が個人の価値観を超えて絶対的な尊厳性をもつて存在することに気づいている。	あらゆる存在が個人の価値観を超えて絶対的な尊厳性をもつて存在することがない。
	2	生かされていることへの感謝	生かされていることに深い感謝の心を持ち、他を生かす活動を実践している。	生かされていることへの感謝の心を持ち、他を生かす活動を実践することができる。	生かされていることへの感謝の心をもっていない。
知識・技能	3	倫理観	人として守り行うべき道について深く考え、それを実践している。	人として守り行うべき道について考えることができる。	人として守り行うべき道について考えたことがない。
	4	知識、技能	社会生活を営む上で必要な幅広い知識をもち、職業人として必要な技能を身につけて活用することができる。	社会生活を営む上で必要な幅広い知識を身につけて活用することができる。	社会生活を営む上で必要な知識や技能が身につけていない。
思考・判断・表現	5	論理的で柔軟な思考と判断力	先入観や既存概念等に縛られず、広い視野でものを考え、論理的かつ柔軟に思考し判断することができる。	先入観や既存概念等に縛られず、広い視野でものごとを力として判断するよう努力している。	いろいろな問題に対して自ら思考し判断することが苦手である。
	6	自己表現力	自分の意見や考えを状況に応じた手段で適切に表現し、相手を納得させることができる。	自分の意見や考えを状況に応じた手段で適切に表現することができる。	自分の意見や考えを表現することがうまくできない。
主体性・多様性・協働性	7	主体的な行動力	責任感・使命感をもって主体的に行動し、成果をあげることができる。	責任感・使命感をもって主体的に行動することができる。	目標の実現に向けて主体的に行動することが苦手である。
	8	他者との協働力	社会を構成する一人の人間として、異なる価値観や社会的背景を理解した上で、連携・協働することを目指す。実践している。	社会を構成する一人の人間として、異なる価値観や背景を理解した上で連携・協働することができる。	他者と連携・協働することが苦手である。

付表③ キャリア育成学科オンスルーコースデザインプロマ・ポリシー到達度評価ルーブリック

観点	カテゴリー	評価3	評価2 (DP達成レベル)	評価1	評価0
知識・技能	A 知識、技能 【専門能力】	オンスルーカーとして必要とされるビジネス実務的な知識やスキルと基礎的なマネジメント能力を身につけ、活用することができる。	オンスルーカーとして必要とされるビジネス実務の知識やスキルを身につけており、活用することができる。	オンスルーカーとして必要とされるビジネスを身につけており、活用することができる。	オンスルーカーとして必要とされるビジネス実務の基礎的な知識やスキルを身につけておらず、また、活用することができない。
	B 論理的で柔軟な思考と判断力 【シンキング】	ビジネス現場や地域社会で起こりうる様々な変化に対し、常に論理的かつ柔軟に思考し判断している。	ビジネス現場や地域社会で起こりうる変化に対し、論理的かつ柔軟に思考し判断することができる。	ビジネス現場や地域社会で起こりうる変化に対し、論理的姿勢が身についている。	ビジネス現場や地域社会で起こりうる変化に対し、論理的姿勢が身につけていない。
思考・判断・表現	C 良好な人間関係を築く力 【ヒューマンスキル】	ビジネス現場や地域社会の様々な場面でコミュニケーションを発揮するとともに、状況に応じたマナーを身につけて良好な人間関係を築いている。	ビジネス現場や地域社会の様々な場面で求められるコミュニケーションシジョンカとマナーを身につけている。	ビジネス現場や地域社会の様々な場面で最低限求められるコミュニケーションを身につけている。	ビジネス現場や地域社会の様々な場面で最低限求められるコミュニケーションを身につけていない。
	D 主体的な行動力 【アクシヨンプ】	ビジネス現場や地域社会において、自ら課題を発見し、解決に向けて主体的に取り組んでいる。	ビジネス現場や地域社会において、自ら課題を発見し、取り組むことができる。	学生生活や地域社会において、課題を発見し、解決に向けて取り組むことができる。	学生生活や地域社会において、課題を発見し、解決に向けて取り組むことができない。
主体性・多様性・協働性	E 他者との協働力 【チームワーク】	組織の一員として、組織内外の様々な他者と連携・調整したうえで、業務を遂行している。	組織の一員として、組織内外の様々な他者と連携・調整することができる。	組織の一員として、組織内外の様々な他者と連携して、業務にあたる準備が整っている。	組織の一員として、組織内外の様々な他者と連携していない。
	F キャリアデザイン 【キャリア】	自らの将来についてキャリアデザインを描く力があり、卒業時点で描いたキャリアインの表現に向かっている。	自らの将来についてキャリアデザインを描く力があり、実現する準備が整っている。	自らの将来についてキャリアデザインを描く力があり、キャリアデザインを実現する準備を整えようとしている。	自らの将来についてキャリアデザインを描く力がない、あるいは描いてもそれを実現する準備が整っていない。

付表④ キャリア育成学科介護福祉コースデザインプロダクト・ポリシー到達度評価ルーブリック

観点	カテゴリ	評価3	評価2 (DP 達成レベル)	評価1	評価0
倫理	A 倫理観	対人援助の実践をするうえで、介護福祉士の倫理綱領を理解しており、人権の尊厳や人権を守ることができ、倫理観を身につけて、適切に行動できる。	対人援助の実践をするうえで、介護福祉士の倫理綱領を理解しており、人権の尊厳や人権を守ることができ、倫理観を身につけている。	対人援助の実践をするうえで、介護福祉士の倫理綱領をある程度理解しており、人権の尊厳や人権を守ることができ、必要最低限の倫理観を身につけている。	対人援助の実践をするうえで、介護福祉士の倫理綱領を尊厳や人権を守ることができ、倫理観を身につけていない。
	B 知識、技能	高齢者や障害者の介護福祉実践に必要な知識や技能を身につけておおり、適切に活用することができ、それに基づいて指導することができる。	高齢者や障害者の介護福祉実践に必要な知識や技能を身につけておおり、適切に活用することができる。	高齢者や障害者の介護福祉実践に必要な最低限の知識や指導の援助があれば適切に活用することができる。	高齢者や障害者の介護福祉実践に必要な知識や技能を活用することができない。
知識・技能	C 論理的で柔軟な思考と判断	援助対象者の状態に応じて想定される変化や、さまざまな課題に対し、適切に判断することができ、柔軟に思考することができる。	援助対象者の状態に応じて想定される変化や、さまざまな課題に対し判断することができ、柔軟に思考することができる。	援助対象者の状態に応じて想定される変化や、さまざまな課題に対し判断することがある程度できる。	援助対象者の状態に応じて想定される変化や、さまざまな課題に対し判断することができない。
	D 自己表現力	介護福祉実践において生じているさまざまな知識を活かして、関係者に対して自己分たの意見を表現し、他者の理解を得ることができる。	介護福祉実践において生じているさまざまな知識を活かして、関係者に対して自己分たの意見を表現することができる。	介護福祉実践において生じているさまざまな知識を活かして、関係者に対して自己分たの意見を表現することができる。	介護福祉実践において生じているさまざまな知識を活かすことができない。
主体性・多様性・協働性	E 主体的な行動力	地域社会や福祉施設などにおいて、自ら課題を発見し、主体的に取り組み、他者の模範となることができる。	地域社会や福祉施設などにおいて、自ら課題を発見し、主体的に取り組むことができる。	地域社会や福祉施設などにおいて、自ら課題に向けてある程度目標を取り組むことができる。	地域社会や福祉施設などにおいて、自ら課題に向けて、主体的に取り組むことができない。
	F 他者との協働力	他職種との役割を理解し、組織の中心となつて調整しながら連携・協働して物事に取り組むことができる。	他職種との役割を理解し、組織の一員として調整しながら連携・協働して物事に取り組むことができる。	他職種との役割を理解し、組織の一員として調整しながら連携・協働して物事に取り組むことができる。	他職種の一員として調整できず、組織の意見を聞き、調整しながら連携・協働して物事に取り組むことができない。